

ブログ二百十六万アクセス突破記念

故父藪野豊昭所蔵

川路柳虹詩集

波

(初版・限定五百部・並製版)

藪野直史 全電子化注(注©)

「やぶちゃん注・毎日、亡き父の遺品整理に追われている。父は、あまり本を持っていなかった。半分はシュールレアリスム関連の芸術書（父は、よく、旅で宿帳を書く際、「職業欄」に『シュールレアリスト』と書くのを常としていた）、後は、戦後直ぐにのめり込んだ反戦運動（父は戦中は愛国少年で、鎌倉最年少の陸軍航空通信特攻隊として、竹竿の先に模擬地雷をつけて、模擬戦車（木製）の下に飛び込む練習に明け暮れた。敗戦後、百八十度、思想転換をし、日本共産党に入党、「うたごえ運動」の一員となっていた）関連の書籍が大半を占める（特異点としては、鮎の「ドブ釣り」（≡毛鉤釣り）の事務局長をやっていた関係上、鮎絡みの本が多い）。画家として認めてくれて、終生、私淑した瀧口修造の単行本の半分、みず書房の『コレクション 瀧口修造』（全十四冊）、青土社の『アンリ・ミショー全集』（全四冊）等も私が買って贈ったものである。恐らく、蔵書の三分の一ほどは、私経由である。そんな中に、父が昭和三十年代に買った本の中に、川路柳虹詩集「波」（昭和三二（一九五七）年二月五日発行・西東社刊・並製・五百部限定版）があるのを見つけた。

この詩集の発行日は、私が生まれる十日前に当たる。当時、父母は荏柄天神の敷地にあった貸家の二階におり、画家を目指しつつ、有名な鎌倉駅前の知られた鎌倉彫の主人の弟子となっていた。母は、頼朝の墓の横にあった「頼朝茶屋」で女中をしていた。大学一年の時、訪ねてみたところ、まだ、当時の女店主が現役でやっておられ、私が名乗ると、非常に喜ばれて、お茶と団子を出して呉れた。その時、「私が最初に、『あんだ、妊娠してるんじゃないの?』と声を掛けたのよ!」とおっしゃったのを、今もよく覚えている。

詩人で美術評論家でもあった川路柳虹（明治二二（一八八八）年〜昭和三四（一九五九）年）については、[サイト「ネットミュージアム兵庫文学館」のこちらのページ](#)を見られたい。私は、彼の詩集は所持しておらず、二十代の頃、教冊のアンソロジーで読んだに過ぎない。ブログを始めた翌年の二〇〇七年十一月三日に、『[僕の非在の玄室の碑銘に。](#)』という前置きを添えて、[詩「秋」を電子化しているだけである。](#) この詩集の詩篇も初めて読んだ。

この詩集「波」刊行時、川路柳虹は満六十八歳で、この出版の翌年、この詩集「波」及び過去の業績により、彼は芸術院賞を受賞している。

されば、父の供養代わりとして、この詩集を電子化することとする。それ以外に、私の誕生と強い共時性を持っていることも、何か、偶然でないような気がしたからでもある。現行この詩集（長詩二篇）を電子化したものは、ネット上には見当たらない。

なお、本書は目次に当たる『内容』の最後に『装幀及び装置』として、版画家・銅版画家深沢幸雄（大正一三（一九二四）年〜平成二九（二〇一七）年）の名が掲げられてある。父の古い書簡や記録の中に、実は、深沢幸雄氏からの手紙や彼の名があるのを確認した。父は私が生まれてしばらくして、鎌倉彫の修行を終え、エッチングを始めている。されば、この前後に深沢氏と知り合って、この詩集も、或いは、川路氏の詩よりも、深沢氏絡みで、購入したものであったのかも知れない。しかし、今回、この詩篇「波」を電子化して玩味してみ

たところ、その内容が、父の生きざまや、常日頃、語っていた彼の「人生のポリシー」と異様に似ていることを、強く感じたのも事実である。この詩篇には、確かに――父が――いる――のである。

さて、問題は――この表紙、及び、「内容」の次の次のページの挿絵「波」、詩「波」の次の詩「火の頌歌」の標題ページの下に配された挿絵の三点をどうするか？――であった。無論、深沢氏の著作権は継続している。しかし、当該原本を販売やオークションに出しているものを調べると、例えば、[古書店「書肆田高」のこちら](#)には、本書の特製本（十部限定）版の販売ページ（既に売却）には、表紙の深沢幸雄氏の版画と推定される表紙絵や、「内容」（目次相当）を開いた次の見開き左ページにある、やはり深沢氏の名を印刷明記した版画の画像がある。[「メルカリ」のここ](#)には、限定私家版（と「帯」にあるが、これは私が所持するものと同じ五百部版）の表紙の写真があり、その六枚目には、上記深沢氏氏名は印刷明記された版画の画像がある。これらが、深沢氏への著作権を払って画像を載せているとは、まず、思われない。使用許諾の断りも一切ない。謂わば、著作権の存続している人物の挿絵等が含まれていても、その書籍を販売する目的で商品画像として、著作権存続物を対象著作権満了書籍の画像の一部込みで示すことには、許容されると判断される（但し、これには、若干の著作権に於いての疑問が感じられる。する。例えば、萩原朔太郎の「猫町」（リンク先は私の古い横書サイト版）には、素敵な川上澄生（著作権存続）の挿絵があるが、それを一部たりとも画像として出しているネット上の「猫町」は、古書販売の原本表紙の画像しか存在しないからである）。ともかくも、以上の現状から、深沢氏の版画を配した表紙・背・裏表紙（白紙）、「内容」の後に配されている深沢氏明記の挿絵、詩「火の頌歌」の標題ページの下の配された挿絵（~~ズ~~と読めるサインが右下方にある）を画像で挿入することとした。それは、以下の「内容」の最後に「装幀及び装置」とあるのが、深沢氏の版画等も総て『装置』として川路が認識していることが、私が深沢氏の作品を挿入してよいという判断の強い味方になると考えている。則ち、深沢氏の絵は、詩篇を総合芸術的に豊かにするためのものであり、それらの絵も、川路柳虹の本詩集「波」の芸術的「装置」として存在し、川路名義の詩集としてソリッドなモニタージュの一部であると、川路自身が全体を認識しているからである。これは、深沢氏の絵を「不可分な自己の詩集の身体の一部」と捉えていることには他ならないのであって、絵をカットすること自体、川路は敢然として拒否するもの、と私は思うのである。但し、万一、深沢氏の著作権者から指摘があれば、それらの画を、総てブラックで、マスキングして、処理するつもりでは、ある。

★但し、本サイトPDF版では、画像を読み込ませると、ルビのための行間を広げてある関係上、上手く挿入出来なかったため、画像はブログ版リンクとする。

本詩集は、本文は長詩である詩篇「波」と「火の頌歌」の二篇のみで、最後に「あとがき」が載る。戦後の出版であるが、概ね漢字は新字であるが、時に正字が混交している（例えば、「青」と「青」が混在している。これは川路の原稿は恐らく「青」のつもりで書いていたが、植字工が、二種あるそれを、区別せずに用いていて、組んでしまった可能性が高いと私は思

う)。それらは忠実に Unicode で可能な範囲で電子化した。歴史的仮名遣と現代仮名遣も混交しており、拗音・促音もなっていたり、なっていないものもある。特に注意して、そのまま載せてある。基本、五月蠅くなるので、特にママ注記は附さない（誤植と考えられるものは別）。また、二字分ダッシュ「―」は、明らかにぎっくりと太く黒い「――」となっているので、野線文字で、その通りに見えるように処理した。注は、長詩なので、ストイックに選び、連の切れたところに挿入した。

本サイト版は、ブログで二回分割で（ここと、ここ）で電子化注して公開したものを元に、縦書一括PDF版（ルビ附）としたものである。

なお、これは、二〇〇六年五月十八日のニフティのブログ・アクセス解析開始以来（このブログ「[鬼火く日々の迷走](#)」開始自体は、その前年の二〇〇五年七月六日）、本ブログが、二〇二四年五月十六日夕刻、二百十六万アクセスを突破した記念としても公開するものである。【二〇二四年五月十九日早朝 藪野直史】

波

川路柳虹詩集

東京西東社

「やぶちゃん注」画像（カラー）は表紙。「川路柳虹詩集」は「波」の下方だが、視覚的に上手く入らないので、後ろに配した。」

波
川路柳虹詩集

「やぶちゃん注」画像（カラー）は背。」

詩集

波

川路柳虹

「やぶちゃん注：画像（カラー）は扉。同前で、以下のように配した。」

内容

波

火の頌歌

あとがき

装幀及び装置

深沢 幸雄

「やぶちゃん注：画像（モノクローム）は左ページ。目次相当。但し、リーダと漢字ノンブルは略した。」

深 沢 幸 雄 画

波

「やぶちゃん注：深沢幸雄の挿絵画像（カラー）は「内容」の次の次の左ページ。ケント紙に印刷挿入綴じ込みされてある。画家の姓名と「画」は印刷。
以下、詩篇「波」本文に入る。」

波

—

ひろびろとした天の星座、

わたしはおまへの何であるかを知らない。

漆黒の塗板ぬりいたにちりばめた数かずの寶石、

瞬きながら速くこの海に

光りを曳く星たちよ。

音も立てない波は従順に

星たちの姿を揺さぶりながら

すこしづつ 彼方かなたへ、彼方かなたへと動いて行く。

夜の海は静かに睡る

愛しい嬰兒あかこのやうだ。

この世界に棲むあらゆるものの寝息が

いま二すぢの香煙てんとなって

遠いあの天へと昇る。

「やぶちゃん注…パート標題「I」であるが、実は次のパートは「II」となっている。しかし、この「I」は「I」の横組みではなく、漢数字のゴシックの「一」である。無論、川路は原稿には「I」と書いたであろうから、これは植字工の誤植で、校正係も気がつかなかったことになるか。川路は最終校正を行っていないはずはないだろうが、余りにあり得ないだけに、うっかり見落とした可能性もあろう。ともかくも、結果して、イタい誤りではある。」

しづかに、だが、はつきりと

何か囁いてゐる波よ、

声をひそめて

おまへの語る言葉を 私は聞かう、

波よ、語つておくれ、

吾らの「在る」意味を――

生きてゐる、動いてゐる

ひと時も休まず、そして

何ごともないやうな

「時」の、「実在」のころを。

天のどこかが裂けて
征矢のやうに流星が落ちる。

――（見知らぬ遠い世界の破片が）

だが、この広い海では ただ、

一すぢの光りにすぎない。

蒼ざめて消え去る星よ、

おまへの隕石がどこかで

大きな穴を地球に穿たうと、

この世界はただ安らかに 軒を立ててゐる。

夜、ひそかな祭壇、

星座は宛ら高い薔薇窓の色硝子、

その光の下で

誰もゐないこの海の大伽藍の

ひっそりとしに内陣に

ただ「声」だけが訪れる。

波よ、おまへの囁いてゐるその響が、

おなじやうなその旋律が、誦経のやうに、

え知らぬ一つづきの声に聴かれる。

「やぶちゃん注：「薔薇窓」これは、ゴシック教会建築などのファサードにバラの花のよ
うな形で作られた円窓。教会の精緻な大きいステンド。グラス (Stained glass) は、英語で
別に「Rose window」とも呼ばれる。英文ウィキの「Rose window」を見られたい。」

わたしは懺悔をしようと思はぬ、

わたしには罪とか、贖とかは解らない。

この広大な海の上では

さういふ小さな名詞などは

どこかに消えてしまふだらう。

人間世界に犯した一人の

罪も、或ひはおのれ孤りの心の

反逆や、過失や、無智も、

どこかに消えて終ふ。

吾らの観念といふ不熟な果実は

この波に浮く小さな泡沫にすぎない。

波は秘かなひびきを

すこしづつ高める、
波は星を戴いたまんまで
遠い陸地を目ざしてうごく。
永い「夜」はただ黙つてゐる、
苦しいばかりの吐息を
その胸に匿しながら。
「やぶちゃん注…「孤り」「ひとり」。
「終ふ」「しまふ」。」

わたしは眼を閉ぢる、
声にとつて、見えることは迷はしだ。
波よ、夜のなかで光る波よ、
さながら生きてゐる獣のやうに、
おまへの姿はうねりながら
すこしづつ背丈を伸ばし
一やうな足どりで蹴る。
死から不死へ、
不死から死へ、
転生しつづける存在よ、
わたしの閉ぢた眼は
ただ幻影としておまへを記憶する。
もしか不意にわたしが
このままこの海に落ち込んだとしても、
おまへの姿はやつぱり
消えない一つの波だ、実在だ。そして
おまへの歌ふ声だけが
永続をさながらに。
しかし、わたしは不幸にも
ただ「知らう」としてゐるのだ、
おまへのうねりが杜絶えずつづく、その
永達と変化の意味を 在ることの心を、その確かさを。
「やぶちゃん注…「杜絶えず」「とだえず」。」

II

かすかすの追憶が影絵のやうに

閉ぢたわたしの瞳にうつる――

晴やかな海、

瑠璃紺の浜辺、

軽装の少年水夫が

猿のやうに帆桁にのぼつて、

帆綱を結び、また切る。

傾いた帆は風を胎んで

船は水沫をあげ、海へ踊り込む。

帆を掲げた船よ、勇ましい青春よ、

おまへは何の不信もたず

晴れやかな風に微笑んで

ただ動く海を突つ切る。

空がいつか曇つて、

海は鈍み、波は吼える。

ぴしぴしと鞭打つ風のしはぶき、

三角の紙片を千切つた

白いたくさんの帽子が光る。

暗い雲の渦巻――

垂れさがる大きな魔の翼、盛り上る龍巻、

波は激しく身慄ひしながら

憑かれたもののやうにただ突き進む。

その激しい懐のなかで

揺さぶられてゐる可憐な船よ。

五月から真冬のどん底に落ちたやうな

悲しさと驚きに漂泊してゐた

わたしの遠い青春！

ぼろぼろになつた船が港へ入る、

港は安らかな老後のやうに

鈍い秋の陽を浴びて平和だ。

波よ、おまへは嵐などまるで忘れて

無口な女のやうにしづかに

意味のない調べで岸を吻める。

昨日あつたことを、

あのすさまじい現象を

けろりと忘れてゐる不遜な自然よ、
おまへの残虐に傷いた魂と肉体は
玩ばれた怨みを復讐する術もなく
ただ疲労にうつけてゐる。
ちぎれた帆綱に光る秋の陽、
一切の破滅のあとに残るこの無為。

だが、忘れてゐた意識が蘇る。
生きてゐたといふ意識が、
少しでもある生命の温みが
わたしの眼を正しい位置に還す。
破れた船を繕ひ、
新しい出発へと、
新しい航海へと、
希望が薄闇のなかで花をひらく。

*

いのちとは何だ！
生きてゐるものの不可思議よ！
それは与へられたもので
また絶えず作りいだすものだ！
目的も定めず、終焉もなく、
自然が休まない時間に在るやうに、
死と欲望のせめぎを乗り越えて
絶えず前へ前へとすすむ
波よ、おまへこそ生命だ、
いのち宛らだ！

「やぶちゃん注…「宛ら」「さながら」。前に出た。」

激しい突進で岩に砕け、
散つた水沫はまたもとの海へ還る、
不変の精子、永遠の精液、
そして絶えざる情慾に燃えながら、
清潔な童貞に生きる、
おまへは処女の羞ひとと青年の夢との
組み交はす不所の組織、朽ちざる細胞、
翼のない不死鳥、力の内在する磁極。

波よ、おまへの動きのただ中であつて、

おまへの解らなさを解かうと

風は絶えず鞭ち羽搏く。

おお、限りない侮蔑よ、限りない残虐！

しかし、その侮蔑は飛沫となつて空に還る。

おまへはただ怒り、吼え、応へ、叫喚し、

いつかまた巧みに不明へと逃れる。

「やぶちゃん注…「羞ひとと」はママ。後の「と」は衍字。

「組織」ママ。以下の「細胞」から、明らかに「組織」とあるべきところで、イタい誤植である。」

ああ、知の聡明も摧ける、だが
撓はんではならない努力よ。

わたしたちの知るこの世界は

ただ現象と経験との場にはすぎない。

そして不断の時間にかかはる

律動と秩序の世界だ。

宇宙をつくるものの内部を

その意味を、価へを、

吾らに知らずものは何もないのか！

在るものの凡てに従順に、

眼かくしされた世界に生きてゐる吾ら！

波よ、私たちはおまへと同じ息のなかで、

高い しとどかない天をのぞみながら

生き、また死ぬのか！

自然も営み、産み、働く。

なにもへの奉仕でもない自らのために！

波よ、あまりに解り切つてゐて

すこしも解らないこの生きてゐることの謎よ！

どんな手探りで掴まうと解けない意味！

「夜」は深まり、苦悩は重なる。

おお、星よ、仁愕光る彼方の実往！

ひとり吾らの知りうる境を乗り超えて、

対数表の煩さい数字を乗りこえて、

あの不可知がなんときれいに光る！

掴まう！ みづからの腕を。
捉へよう！ みづからの脈膊を。

いのちは「知る」ものではなかつた！
生命はただ捉へればよいのだ！

おまへの内にあるすべてが
彼処にあるものと同じだと、
捉へたところに万物が生きるのだ！

波よ、だがあの向うの島から
もう夜明けが訪れはしないか。

おまへの一向な歩みが
あの岸へ、碧の浜辺へと近づくとき！

なにもものか、大きな鳥がすぎる、
爽昧の空を斜めに

羽搏く翼に朝の嵐を呼んで、
高く、高く、翼は廻旋する――

さながら一切を征服する身構えに。

ああ荒鷲よ、陸地を離れて、
おまへは失望を果すといふ風に、
波を目掛けて突進し、下向し、
また高く、雲のなかへと姿消す。

「やぶちゃん注…「爽昧」（さうまい（そうまい）は「夜明け・暁」。「爽」は「明るい」
（その場合は「曙」）、「昧」は「暗い」（その場合は「暁」の意。）」

自由が勝利を歌ふその翼よ！

おまへの意慾は周囲を顧みず、
意志の悲劇をすこしも知らない。

ただひた向きに行動する征服の力よ！
しかし、波は永遠に低いこの海にあつて、
絶えず歩む一つの生きもの。

荒鷲の死屍が山の岩角に曝されても
波は死なない、波はまだ動いている。

波は動いたまま朝を呼ぶ——
勝利を知らない捷利に酔つて、
おのづからに來る光明を、
おのづからに生む朝あしたを、
その不斷の滑らかな背そびらにうけて……

もう星々の光りがうすれて、
力ない光芒が空から消える、
ああ日々ひびの繰返くりかへし——
だが、夜明よあけはいつ見でも何といふ希望、
そして、なんといふ新しさだ。

私たちの眼の曇りが晴れて
潔さやかい砂浜すなが光りだす。
漂ふ霧の薄い面紗フェールを透して
おまへは薔薇いろに燃えてくる！

おお、波よ、不死の継続よ、
輝やかなアドニスアドニスの瞳に
うつる下界の青空。
或はよみがへる病後の爽やかさ、
また少年の淨らかな情慾よ、勃起よ、
ふたたび味はふ青春の快味よ。

見よ、太陽の矢が無数に
おまへの鬨る裸身の背中を突き刺す。
鱧と鰐鮫ウナギが、ふかい海底から
小気味よく躍り出す。

美に慄おそふ眼まなこが、危さを愛するやうに、
輝きのなかに凡てを把握しようとする力よ。
陰影や、罪惡、卑少や、消え失せる無力よ！
みづからの欲求の激しさに身慄おそひする
吾れと吾が身に驚く美への志向に、

その瑞みづみづしさに、若さに、
吾ら雄々しく、いつも、裸形ちむかやうであれ！

「やぶちゃん注…「面紗フェール」「めんさ・めんしゃ（めんしゃ）」と読み、女性が顔をおおう薄絹のこと。「ベール」。「veil」は音写すると、「ヴェール」。

「アドニス」(ラテン文字転写：Adonis)はギリシア神話で、女神アフロディテに愛された美青年。狩りでイノシシに突き殺された時、その血からアネモネが、女神の涙からバラが

生じたとされる。」

朝だ、新しい出発だ、

わたしたちは凡てを新鮮に見るのだ。

わたしの胸にある不可知は子供のやうに、

いま、この光りのなかに眼をあける。

おなじ世界だ、しかし異つた朝だ。

永達を造型してゆく、酸素のやうな

いつも新鮮な「時間」よ。

波よ、おまへの言葉は

あの暗闇のなかから抜け出て

ふたたび行動の世界に歌ひ出す！

わたしたちはただ観ることで生きよう！

「観ること」はやがて「創り出す」ことだ！

おまへといつしよに思考をいつも

新しく原始から始めよう！

それは激しい「継続」なのだ、常に、

生きまた死につつ始るのだ！

波よ、おまへのしとやかな歩調に、

高まりどよもすりズムに、

わたしも裸身となって

この爽やかな朝の嵐に立たう！

波よ 不断の浪よ 永続の波よ、

破壊の波よ 力の波よ。

石のやうな建設を企てず、

流動のうちに創りいだす波よ、

轟きわたる勝利を たましひ 霊の電波を

潮うしほとなつておなじ響に、また言葉に、

世界のあらゆる果まで呼びかける波よ、

永劫回帰の波よ 波よ 波よ 波よ 波よ！

(一九四七年)

「やぶちゃん注：「リズム」はママ。誤植。」

火の頌歌

「やぶちゃん注：『火の頌歌』の標題独立ページ（左ページ。ケント紙印刷挿入綴じ込み）の画像（経年劣化でヤケているため、トリミング後、清拭補正を加えた）。深沢幸雄画には、右下方に『Y.K』の手書きサインがある。

「頌歌」は一般には「じゅか（じゅか）」で、所謂、「オード」（ode）。崇高な主題を、多く人や事物などに呼びかける形式で歌う、自由形式の叙情詩。「しようか（しようか）」とも読み、「頌賦」（しょうふ）とも言（個人的には「頌」の別音で「コウ」で読みたくなるのだが）。但し、川路は本文で「頌歌」に「ほめうた」とルビをしているので、ここも「ひのほめうた」と読むべきであろう。さて、この像は、一見、複数の臂を持っているように見えたことから、私はヒンドゥー教の女神ドゥルガー（ラテン文字転写：Durgā）ではないかと思っただが、第一連に「破壊と創造の神湿婆（シバ）」と出るので、インドの神シヴァ（Śiva）と知れた。「リグ・ヴェーダ」等のヴェーダ文献では「ルドラ」の名で知られる。ルドラは暴風神の一面のほか、理由なく家畜などに害をなす恐ろしい神であった。それ故、「パシュパティ」（家畜の主）・「シヴァ」（優和なもの）・「マハーデーヴァ」（偉大な神）などの名で宥められた。ブラフマー・ヴィシュヌと並び、ヒンドゥー教の三大神の一神で、「世界を破壊する神」として、恐ろしい一面を残す。インド各地で崇拜されていたさまざまな女神が、パールヴァティー・ウマー・ドゥルガー・カーリーなどの名で、シヴァの配偶神となった。身体に灰を塗り、蛇を首に巻き、髪の毛を乱した苦行者の姿で現れるが、インド各地の数多くの寺院では、女陰の上に立つ男根の形の像（リング）の姿で礼拝されている。以上は、主文を山川出版社「山川世界史小辞典」に拠ったが、そこにあるイラストが、よく一致する。また、当該ウィキの『ナタラージャ（英語版）』として踊っているシヴァ。チョーラ朝時代の物。ロサンゼルス・カウンティ美術館。』とキャプションがあるカラー画像もよく符合する。

因みに、本詩篇は——この詩集の発行された十日後に生まれた私には——恰も——私に対して語れた詩篇のような——気がした……………」

火の頌歌

—

わたしは想ふ、あの巨きな祭壇を、
廻る焔の渦にとり捲かれた
破壊と創造の神湿婆を。

「やぶちゃん注…この一行目には「を、」の後に「」のようなものが見えるが、これは植字の際の枠が出っ張ったものと断じて、無視した。」

生命の火を、
力の火を、
無数の手の仕事を。

その源を、
そのたゆまぬ動きを、
その跳躍を、
その怒を、
その歡喜を。

おまへは火の肉身、
おまへは火の所業、
おまへは火の頌歌。

おお、内在の焔よ、
わたしの生れぬ以前から
わたしの墓場で朽ち果てる未来まで、
泉のやうに湧きいでる
不可思議の持続よ。
暴虐の楞伽よ。
逞しい不屈の
死を征服する力よ。
混沌の中に交って
生命の種子を求め

清純な血液の種族よ。
想像の力で羽搏きながら、
いつも眼に見える世界を創^{つく}ってゆく、
あの雲のやうな自由と、
あの汗のやうな必然とで、
生みいだし、生みいだし、
また碎^{こわ}し、うち碎^{こわ}し、
停^とることを知らない神湿婆^{シバ}よ。
おまへの智慧はどこから来^くる！
この世界の巧みな構造を、
寸分^{たが}も違はぬ秩序と変化を
おまへ自身^{みづか}の肉体に包蔵^{ほうざう}して
おまへは人間に君臨^{きんりん}する。
原子^{げんし}の秘密^{ひみつ}を解^とった人間が
その猾^{さか}しらな手で地球を碎^{くだ}さうとも、
おまへの破壊はまだ止むまい、
おまへの創造はまだ止むまい。
「やぶちゃん注…「おまへの智慧はどこから来^くる！」の「来」は底本では「米」であるが、
「来」の異体字には「米」はないから、誤植と断じ、特異的に訂した。」

二

この世にひとりの嬰児^{あかご}が生れた、
神に祝福^{しゅくふく}された生命^{いのち}で
声をかぎりに泣きながら。
世界に一つの霊^{たましひ}が増えた、
加へられた一つの霊^{たましひ}よ。
だが、その生命^{いのち}は
この人間の世界では
ただ一つの数^{かず}にすぎない。
羊水のなかから投げ出された
その「一つ」よ、孤独な生命よ。
血と粘液に染まった花の荅^{こたへ}よ。
兩親^{ふたおや}は貧しくて、
ふたりの作^{つく}った分身^{ぶんしん}に対して

ただ悲み悩んでゐる。

おまへの運命の始りが

歎びと涙で充されながら

おまへの吸う乳房の

そのゆたかな含らみのなかに

この世界を呪ふ種子たねが播かれてゐる。

呪はれた生命よ、——地上の。だが、

おまへは生きてゆく、

おまへの眼とおまへの手が

いつか自らみづかを作つてゆくまで。

その「自ら」を知る理性と本能が

ふたたび妖はしい愛の華を開かず。

それこそ内に潜んだ永遠の

湿婆シバの焰の戯れだ、因果だ。

悲劇がそこから生れる——

幾代いくだいも同じ人間の悲劇が。

「やぶちゃん注…「妖はしい」以下の「三」の第二連に出るルビに従い、「まよはしい」と訓じておく。」

だが、その戯れは正しい、

それは火の所業だ、

われら心つつましく

その火を讃たたへよう。

湿婆シバよ、

おまへの所業に繋つながる宇宙こそ

みんな戯れだ、(大きな)鱒の戯れだ!

三

燦爛ほしほしとした星々の光りに

人間の愛のとどかぬところで

宇宙はその構図ひびを展ひらげている。

その下で燃えつづける

焰よ、湿婆シバの祭壇よ。

吾ら与へるものも、

また亨くるものも、
この世界ではひとしきり所有だ。
劃り立つ岩々の黒い影、
夜の階黒をいや深くする森、
その森の重る中の銀灰色の祠堂よ、
この存在のおぼろかな中にも
ひとしい「影」として立つ吾ら。

「やぶちゃん注…「劃り立つ」「くぎりたつ」と訓じておく。」

まことに所有は影でしかない、
わたしたちは何を有つのか！
わたしたちのこの世にもつてきたものは
火葬場で焼かれる肉体、蛆蟲の餌となる骨、
わづかな一握の友と埃だけ。

ああ無にひとしい存在よ、
現象は妖はしか虚偽か、
今日在って明日は消え去るもの、
輝かしい色と光りに充されながら、
ただ「時」のなかにうごめく陽炎――

だが、その「影」にのみ頼る吾ら、
その影をまこと美しとおもひ、
まことの所有と信じあひつつ
それと抱きそれと苦しむ吾ら。
そのなかに湿婆よ、

おまへだけが「時」から「時」へと
無際限の力で生きつづける。
焼け爛れた朱色に輝く
楞伽よ、生々の立体よ。

尽くるなき神の戯れの激しさに
湧き立つ溶漚の泉は水沫をあげ、
おまへの多手はそこから
死滅しても、死滅しても、
あとから、後から生みいだす
創造の秘密を掴む。

ああ、湿婆よ、おまへだけが有つのだ。

「やぶちゃん注…底本では、この「35」ページは「死滅しても、死滅しても、」から、以

下の「あらゆる「影」を、湿婆よ！」までであるが、印刷時にこのページだけが、通常より、三字分下って印刷されてしまっている。版組みの誤りであるから、無視した。「溶邇」^{ヨニ}「ヨニ」とも。サンスクリット語（ラテン文字転写：yonī）。女性生殖器、また、子宮を指す。」

四

さらば破壊せよ。

この誤ったに世界を。

湿婆よ、その多手をあげて

破壊せよ、錯誤の一切を。

在るものを、死を、悪を、偽りを、

^{かたよ}偏った無益な富を、機構を、

あらゆる「影」を、湿婆よ！

おお、円満の智慧、^{ブラフマ}梵よ、

おまへの光りはいまどこにある！

手を携えて躍る^{バイシユヌ}毘湿奴よ、

おまへの清明はいまどこにあるか！

雲に蔽はれた^{つげよ}月夜、

遠くへわたる空の^{かげろう}浮蛾、

その微かな^{こち}羽搏きの生よ、

そのほの明るみよ。

哀れな人間の哀訴と屈従と夢よ、

いたづらな^{むな}虚しいものへの憧れよ。

「やぶちゃん注」^{ブラフマ}「梵」ブラフマン（ラテン文字転写：Brahman）は、本来は、インドのバラモン教思想で説かれる宇宙の根本原理。もとは『聖典「ベーダ」の言葉』、及び、『それが持つ呪力』を意味した。自己の主体的原理である「アートマン」と対比的にも用いられ、この場合、「ブラフマン」と「アートマン」は合一する（「梵我一如」とされる。そこから転じて、シバやビシユヌとともに、ヒンドゥー教の最高神。後に、前二者にとって代わられ、仏教に取り入れられて、「梵天」となった（小学館「日本国語大辞典」に拠った）。

「毘湿奴」^{バイシユヌ}ビシユヌ神（同前：Visnu）。漢訳では「毘瑟簸」「毘紐」なども表記する。ヒンドゥー教に於いて、破壊の神シバと並ぶ最も有力な神格で、持続の役を負う。元来は太陽神で、「天界を三步で歩く」と言われ、「愛の神」として、信者に平等に恩恵を与え、クリシユナ・ブッダなど十種の化身を現じて、人類を救済するとされる。ブラフマン（梵天）・シバとともに三神一体をなし、神像では正面にブラフマン、右にビシユヌ、左にシ

バを配す（同前）。」

巧みな蜂の巢の技術よ、文明よ、
空そそる巨石の層樓、

地下這ひめぐる黄金蟲の鉄道、

一瞬に地球を廻る蟋蟀はつたのジェット機よ、

だが吾らの幸福はそこにはないのだ。

彩織りなす光りと影よ。

去れ、去れ、忌はしい諸々の影よ、

ただ意味を加へよ、この世界に。

建て直せ一切を！

すべての消え去る映像のあとに！

この世界を、不動の實在にまで！

「やぶちゃん注：「蟋蟀」一般には、この漢字は、広義には、直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目コオロギ上科 Grylloidea に属するコオロギ類を指示し、「しつしゆ（しつしゆ）／＼こほろぎ」と読む。時に「きりぎりす」（直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目キリギリス下目キリギリス上科キリギリス科キリギリス亜科 Gampsocleidini 族キリギリス属 Gampsocleis や、青森県から岡山県に棲息するとするヒガシキリギリス Gampsocleis nikado 及び、近畿地方から九州地方を棲息域とするニシキリギリス Gampsocleis buergeri の二種に分ける考え方が一般的である）と読む場合もあるが、私は支持出来ない。通常、コオロギを「バッタ」と読むことは、極めて異例であるが、川路はそのようにルビを振っている。古典文学研究では、「蟋蟀」はコオロギであると私は信ずるものである。より詳しくは、私の「[和漢三才圖會卷第五十三 蟲部 蟋蟀（こほろぎ）](#)」、及び、「[和漢三才圖會卷第五十三 蟲部 莎雞（きりぎりす）](#)」の私の注を参照されたい。」

われらの所有は誰のものか、
われらの所有を神に還せよ。
すべての人間の生きる
まことに生きる力の源に！

火よ、清浄にして虚無なる、
虚無にしてまことの實在なる
火よ、[面を輝かして跳る湿婆](#)よ、
内在の楞伽リンガよ、破壊の手に、
創造の恍惚に、燃え上あが（あが）れ、焰よ、焰よ！

（一九四七年）

「やぶちゃん注」：「湿婆」は底本では、ルビが「しげ」となっている。誤植と断じ、特異的に訂した。

以下、川路による「あとがき」。

あとがき

前集「無為の設計」を出してから早くも十年近い月日がたつた。この詩集は終戦後にかかれた作品のなかから選ばれた二篇である。このあとにかかれたものと、この二篇とは詩の性格が異なるので一冊にまとめ難いため、まづ、先きにこの二篇を離して出すことにした。私の今の詩境はむしろこののちの作品にあるのだが、それはなほ推敲中なので他日に発表を待つことにする。

この二篇は概して言へば私の作品としては浪漫的なものに属する。「波」はかつて戦後に出た或る小雑誌に発表したものだが数年かかつて推敲し、いくたの行を改削した。「火の頌歌」は全く未発表の作であるが創作後これも推敲改削を経て一年前に完成したものである。「波」に現はれた内容の一部はすでに「勝利」「歩む人」等に現はれてゐる生命の神秘観であり、「火の頌歌」はそれを印度教の思想の中に見出した生命根元の礼讃である。「波」と「火の頌歌」は前集に収めた「雲のうた」を加へて私の三部作の形になった。

昭和三十一年十二月

著者

「やぶちゃん注」：「無為の設計」昭和二二（一九四七）年三月富岳本社刊の詩集「無為の設計」。国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで、全篇が視認出来る。

『「波」はかつて戦後に出た或る小雑誌に発表したもの』調べたところ、竹井出版発行の雑誌『文藝大学』（二巻二号・昭和二三（一九四八）年二月発行）に掲載されている。

「改削」（かいさく）は「改削」に同じ。語句などを改めたり、除いたりして、文章を直すこと。

「勝利」詩集書名。大正七（一九一八）年曙光詩社刊。国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで、原本詩集が視認出来る。

「歩む人」詩集書名。大正一一（一九二二）年大鏡閣刊。国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで、原本詩集が視認出来る。

「雲のうた」詩集「無為の設計」巻頭に配された詩。同前で、[こちら](#)から。」

「やぶちゃん注」以下、[奥附（カラー）](#)。一行字数を現物と一致させた。」

詩集「波」五百部 限定版・著者 川路柳虹・
昭和參拾貳年貳月伍日・印刷發行・發行所・
東京都中野區大和町貳七四番他・西 東 社
發賣東京都千代田區神田神保町壹之七十字屋書店
特製本・深澤幸雄・腐蝕鋼駢原画入・頒價壹
千貳百圓・拾部限定・不許複製
並製頒價壹百貳拾圓

故藪野豊昭所蔵 川路柳虹詩集「波」
(初版・限定五百部・並製)

藪野直史電子化注 完